

# 「地形地名」と「歴史地名」の楽しい世界 道を歩けば地名に当たると

「○○が丘」や「××台」といった取って付けたような地名はツマラナイ。はるかに面白いのは、地形や風土や歴史に由来した古くからの地名だ。味わいも深いし、かつ後世へのメッセージにもなっているからだ。日本地名研究所の菊地恒雄さんに話をうかがった。

日本地名研究所事務局長・研究員

## 菊地恒雄

●きくち・つねお 1944年生まれ。立正大学文学部地理学科卒業。川崎市の小学校教諭、校長を経て、地名研究に入る。川崎地名研究会会長。日本地名研究所の情報誌『地名と風土』編集委員。

## 盗っ人という地名のいわれ

——住所とまったく関係ない名称がついたバスの停留所や、学校、公園などを見かけることがあります。そうした名称は何かいわれがあるんですよね。

もちろんです。たとえば、日本地名研究所（川崎市高津区溝口）の近く

にも、大陸天という名の児童公園があります。住所でいえば、高津区二子四丁目です。それなのに、なぜ、大陸天児童公園と名付けられたのか？ 子どもたちは疑問を持たずに遊んでいますし、公園の名前の由来に関心を持っていない親御さんや住民もあまりいないでしょうね。

大陸天は、もともとは「第六天」と表記しました。神道で、日本をつ

くった神世の七代の神の六代目の神様が、第六天です。大陸天児童公園には、かつて第六天を祀った神社がありました。しかし明治時代の神仏分離や廃仏毀釈で、各地の第六天神社が姿を消すなか、川崎では第六天が大陸天と名前を変え、正式な行政地名とは異なる通称地名として残って、地域に根付いたのです。

現在の行政地名のほとんどは、江

## 日本地名研究所

1981年、発足。初代所長は谷川健一（1921年～2013年。民俗学者・作家）。各地の地名研究を手がける。全国地名研究者大会、各種シンポジウムの開催のほか、地名、歴史、民俗に関する資料を多数刊行している。2010年、谷川健一は「大地に刻まれた地名の声を聞く」と題して、「日本地名研究所は、今もって日本人としての誇りの伝統を後世に伝えるための精神の塔であります。二十一世紀を迎えましたが、日本は相変わらず深い混迷の霧に包まれております。この時まず日本人がなすべきことは、自分の立っている大地をよく知ることです。その大地に刻まれた地名の声によく耳を傾けることです」と、研究所のホームページに記している。

戸時代の村名がルーツになっていきます。明治時代の市制・町村制施行で行政区画の基盤が形作られました。日本地名研究所が川崎にあるので、川崎の例が多くなってしまつたのですが、このあたりなら、溝口、二子、久本、久地、下作延などの集落を統合し、高津村がつくられた。その結果、溝口や二子などの村名は、大字として残りました。

村の生活者たちが使った、より小さな単位が、大字の下にくる小字です。昔は、田んぼの一枚一枚に持ち主の名前や屋号、立地などをもとにした名前が付けられていたんです。溝口の小字では、街道の入り口の意の「棒端」、昔水車があった「水車場」、沼地だった「ドブ」、日蓮宗の宗隆寺の裏手にある「七面山」もそうです。

七面山は、山梨県の山です。どう

して山梨県の地名が川崎にあるのかといえば、七面山は日蓮宗総本山である山梨県の身延山地にある山で、川崎に限らず、七面山と名付けられた地域には、日蓮宗寺院が建っている場合が多い。

地名、それも古い地名には、こうしたいわれからつけられたものが多いですね。このあたりで面白い由来を持つのが「ぬすつと」です。

——泥棒の盗っ人ですか？

そうです。隣村の人が川の水を引いたせいで、水が干上がってしまい、それを水を盗まれたから「盗っ人」というふうに呼んだ。

でも、本当は違ふんです。以前、その集落には多摩川が流れていました。しかし川床が砂利で、乾燥すると薄い粘土層がひび割れる。その状態では、上流から水を流しても水が地面に染みこんで、すぐに水が枯れ